

# 源流の四季

第13号(2004年4月)

春



Spring

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383  
TEL 0428(87)7055 FAX 0428(87)7057

発行責任者/中村文明

協力/多摩川源流協議会(埴山町・奥多摩町・丹波山村・小菅村)

多摩川源流観察会

印刷/(株)サンニチ印刷

http://www.tamagawagenryu.net

E-mail:genryu@mxn.cosmo.ne.jp



新緑の丹波洗谷(撮影:中村文明)

## Contents 目次

- 「多摩川源流プロジェクト21」が答申.....2
- 多摩川源流自然再生協議会が設立.....3
- 吉野川源流資源調査報告書.....4
- 多摩川源流あれこれ.....5
- 流域の視点から見る源流の魅力.....6
- 河川整備計画フォローアップ.....7
- 緑のボランティア募集.....8

# 源流の水と森林は 流域社会の共有財産

「多摩川源流プロジェクト21」は、2月27日、多摩川源流のあり方や今後の具体策を多摩川源流協議会の三枝剛会長に答申した。塩山市役所を訪れた同プロジェクトの高橋裕委員長は、「答申の趣旨を今後に生かしてほしい」と要望、三枝会長は「多摩川源流の自然はかけがえない財産です。流域にとどまらず全国に発信したい」と答えた。当日は、山道省三委員、中村文明源流研究所長らが同行した。答申の要旨は次の通り。



三枝会長(写真左)に答申を手渡す高橋委員長(中央)と山道委員(2月27日)

## 源流プロジェクト答申要旨

源流域は、過疎化・高齢化が急速に進展し、山村に住む人々や山林所有者だけでは森林を管理することは出来なくなっています。今後、源流域の自然環境や森林を守り育てていくために、流域の視点と健全な水循環を確保する立場に立って、私たちは次のことを提案をします。

### 多摩川源流域の基本方向に関する提案

#### 森林は共有財産であり 社会的な仕組みの中で守る

① 源流の水や森林は、流域社会共有の財産です。「社会的に必要なものは社会的な仕組みの中で守り育てよう」との理解と合意の輪を広げます。そのために、2004年10月2〜3日に予定されている「第5回全国源流シンポジウム」で源流の魅力と価値を全国に向けて大きくアピールします。

② 森林の恩恵に依っていくための今後の方策を検討するため、市民、専門家、企業、行政等による「多摩川源流水源基金」に関する検討会」を設置します。

#### 源流域の資源活用や 上・下流交流を推進する

多摩川源流域の生活と文化を守り育てていく上で、都市と農山村の共生をめざす活動や交流はますます重要になっています。また、源流域の森林資源や水資源などを流域の市民生活の中で消費や循環活用できるとすれば、「流域経済圏」という交流の新たな領域が開かれるでしょう。

① 木材の活用や特産品の開発、販売に関する活路を見いだすことは重要です。源流にある本物の資源を都市のマーケットに売り込むための専門家を中心としたプロジェクトを源流協議会内に設置し、資源開発、流通、販売戦略などに関する具体策を探ります。

② 源流の木材の自然素材としての特性や機能を生かした建物や教材、教具、あるいは公共施設材としての利用促進を多くの分野にわたって普及する施策を具体化します。

③ 源流の自然や暮らし、文化などのあらゆる対象を資源としてとらえた持続的な経済・文化圏を構築し、多様な上下流交流事業を積極的に推進し、都市と農山村の共生を目指す取り組みを強めながら、交流人口の拡大を図ります。

#### 市民参加による「森林再生事業」 で100年の森づくりを推進する

流域社会共有の財産である森林

と山村を守り、都市と農山村の共存を図り、持続可能な循環型流域社会をつくるため、専門家、上下流市民、行政と民間のパートナーシップによる、スギやヒノキの人工林の健全なあり方をめざす100年の森づくり「森林再生事業」に取り組みます。

① 市民参加の森づくりの理念のもと、地元や専門家、森林組合、市民が一体となって人工林を対象にした「森林再生」事業を積極的に推進します。

② 民有林の中にある自然度の高い森林は、基本的には、自然の摂理にかなう仕組みで保全します。

#### 源流体験教室など

#### 「環境学習」活動を推進する

源流を対象にした「環境学習・源流体験」を推進します。源流を対象にした自然体験は、川遊びの経験が少ない都会の子ども達の健やかな成長と自立精神を育むだけでなく、日本の自然に対する愛着と誇りを育てていく絶好の機会となるでしょう。

① 多摩川流域のすべての学校の協力を得て「川の源・水の源」を知るための「環境学習・源流体験」の取り組みを推進します。上下流連携を推し進め、健全な水環境と魅力ある川づくりに積極的に取り組みます。

② 源流体験のリーダーの養成や理解者の拡大に向けた研修会や交流会に取り組みます。

# 多摩川源流自然再生協議会が設立

## 元気な源流を再生しよう。

多摩川源流自然再生協議会の設立総会が3月5日小菅村役場で開催された。設立総会には小菅村、源流研究所、教育委員会、村議会、森林組合、養殖組合、NPO法人多摩川センター、NPO法人多摩川エコミュージアムなど、地域住民、流域の市民団体、さらに東京農大の専門家、山梨県、環境省、農水省林野庁など地方公共団体、関係行政機関など25団体、47名が参加した。



自然再生協議会設立総会(3月5日 小菅村役場)

### 源流らしさを追求

設立総会では小菅村の廣瀬村長が「今日の自然再生協議会設立にあたって、一般公募も含め各分野から36名の委員を委嘱させていただきました。多摩川源流の自然を愛する心と熱意に感謝申し上げます。この協議会は広範な人々の声を反映させて、自然再生に関する基本計画を策定・実施していくことになっています。源流域は年々過疎化が進行して村の維持も厳しい時代ですが、交流人口の増加を目指し、多摩川の源流らしさを追求した村づくりを進めていきたいと存じます。この協議会を核として、多摩川源流の自然再生が進みますよう皆様のご協力をお願い申し上げます。」と挨拶した。

その後、準備会事務局から「多摩川源流自然再生協議会設置要綱」が提案され、全員の拍手でこれを承認し、多摩川源流自然再生協議会が正式に設立された。役員体制については、事務局から協議会顧問に高橋裕氏、会長に東京農大の宮林茂幸氏、副会長に鈴木真智子氏(NPO法人多摩川エコミュージアム)、同じく副会長に小菅村在住の小島力氏の推薦があり承認された。事務局は、多摩川源流研究所と小菅村源流交流推進室が担うことになった。

その後、準備会事務局から「多摩川源流自然再生協議会設置要綱」が提案され、全員の拍手でこれを承認し、多摩川源流自然再生協議会が正式に設立された。役員体制については、事務局から協議会顧問に高橋裕氏、会長に東京農大の宮林茂幸氏、副会長に鈴木真智子氏(NPO法人多摩川エコミュージアム)、同じく副会長に小菅村在住の小島力氏の推薦があり承認された。事務局は、多摩川源流研究所と小菅村源流交流推進室が担うことになった。

続いて、参加者全員の自己紹介と小菅村紹介が行われた。委員の自己紹介では「山と川が大好きだ。学びながら、役に立ちたい。」「子ども達に豊かな自然を与えたい。」「等々、この協議会への期待が伺えた。

議事項に入り、林野庁森林整備部の河野通治森林計画官から「自然再生推進法の目指すところ」、山梨県森林環境部の中山基森林計画副主幹からは「多摩川源流の再生に期待するもの」と題した報告を受けた。河野森林計画官は「自然再生推進法は過去に損なわれた自然環境を取り戻すこと、地域の多様な主体が参画すること、自然再生とは保全・再生・創出・管理維持を含む広い概念であること。目的は生物の多様性の確保を通じて、自然と共生する社会の実現にある。」とそのポイントを解説した。

中山森林計画副主幹は「山梨県の森林基本計画では共生林、循環林、保全林の三つを挙げています。こうした県の事業と融合させてこの事業が推進されることを期待している。先人達が植栽した森林資源は今、伐期を迎えている。森林が流域の上流に位置することから、森林の公益的機能が重視される中で、この協議会の設立に期待している。小菅から全国に発信してほしい。」と激励した。

続いて、中村源流研究所長が「多摩川源流再生と源流の未来」と題し、多摩川源流自然再生事業について提案した。内容は①自然再生協議会準備会と委員の公募、②多摩川源流の特徴と最近の動向、③多摩川源流自然再生協議会の趣旨と目指すもの、④自然再生協議会の当面の取り組みについてであった。さらに中村所長は多摩川源流協議会が設置した源流プロジェクト21委員会の答申を紹介し、流域に開かれ、共に歩む村づくりを進め、源流の自然再生を図っていく、その第二歩に多摩川源流自然再生協議会を位置づけようと呼びかけた。

自然と共生する社会を  
その後、宮林会長を座長とし、協

自然と共生する社会を  
その後、宮林会長を座長とし、協

自然と共生する社会を  
その後、宮林会長を座長とし、協

自然と共生する社会を  
その後、宮林会長を座長とし、協

その後、宮林会長を座長とし、協

その後、宮林会長を座長とし、協

その後、宮林会長を座長とし、協

その後、宮林会長を座長とし、協

その後、宮林会長を座長とし、協

# 吉野川源流資源調査報告書

(奈良県 川上村)

全国源流ネットワークは吉野川源流資源調査(日本財団助成事業)に取り組んでいるが、第8回調査(平成16年1月24日~26日)には源流研究所の中村文明所長、小菅村の佐藤英敏源流交流推進室長、東京農業大学の菅原泉造林学研究室助教が調査スタッフとして参加した。ここでは、佐藤室長の源流資源報告を紹介する。

小菅村源流交流推進室長・佐藤英敏

## 「歴史の証人」との出会い

想像を超えるスケール

実際に川上村に入ってみると、以前から話に聞いていた想像の世界を遙かに超えるスケールの大きさと、圧倒されるばかりであった。

一日目は中央自動車道から名阪高速を経て川上村に入ったとき、時



源流資源調査団 (1月25日)

計は午後4時になろうとしていた。村内に入ると対岸の断崖(御掛岩)に「土倉翁造林頌徳記念」の白文字が刻印されていた。滞在中、吉野林業の父、土倉庄三郎氏の名前は心から離れることはなかった。

二日目、外に出ると7センチほどの積雪があったが、森と水の源流館の辻谷さんと現場産業振興課の泉谷さんの案内で、下多古地区の村有林を見学した。この森林には樹齢280~380年の杉10本、ヒノキ52本を含め150年生のスキ林が広がり上り詰めること40分、日本最古の人工林として今に伝える「歴史の証人(樹齢380年)」と出会うことができた。380年前といえは江戸時代。時代の変遷を見守り続けてきた立派な立木に思わず手を合わせずにはいられなかった。このような人工林を他の場所でも安易に見ることができた。この現実を私の小菅村の森林と対比してみた

が、言葉にならない。なぜこの様な森林が今も残っているのか。全てが吉野杉というブランド名で払拭されてしまう。

## 村民の誇り「吉野林業」

吉野林業の歴史を簡単に紹介すると、吉野地方の植林は約500年前の室町時代にさかのぼり、その材は大阪城や伏見城など各地の城築など幅広く利用された。その後、木材需要が飛躍的に増加し、1700年には商業資本の消費貸付を通じて借地林業制度と山守制度が発生し、その頃に木材利用技術の発展による販路拡大が図られ、造林区域が拡大していった。明治維新前後には全国で大乱伐が流行したが、川上村ではその風潮に乗らず高齡林は維持された。その後長伐期施行を基本としているが、1940年頃から樽丸から角柱の短伐期になり、1970年代の吉野杉ブランド化、1980年代からヒノキ、スギ集成材単板の時代を迎えて今日に至っている。

吉野杉は、地元の優良な種取りから始まり、苗づくり、密植、徹底した下刈り、蔓きり、枝打ち、除伐、間伐を経て伐期を迎える。伐採は60

年生頃から始まるが、1000~2000年生以上での伐採も少なくない。午後は「もくもく館」で吉野林業の歴史を研修し、その後、川上村森林組合長南本さんに吉野林業の現状をうかがうことができた。地元の方々の言葉の端はしに、先人から受け継がれてきた吉野林業の精神と誇りを感じることができた。吉野林業の父、土倉庄三郎氏は1840年に川上村に生まれ、その後「土倉式造林法」という独自の造林法を生み出し、日本林業の未来を切り拓いた。今も土倉氏の熱い魂が村に息づき、その魂を受け継いだ村民たちが吉野林業に誇りをもち活躍しているのである。

昨年より小菅村で実施している「森林再生プロジェクト」事業は、ただ単に間伐を進めるだけではなく、まず、適地適木を見出し、苗づくり、植樹までを研究することが必要ではないかと感じた。また、現有のスギやヒノキ林も1000年先を見据えた森林づくりへと移行することも検討していきたい。

## 二つのダム

また、私を驚かせたのは、村内に大きなダム(大迫ダム・大滝ダム)が二

つ建設されていることである。私たちが訪れたときは、貯水による地すべり発生でダムの水が全て抜かれ、湖底には全国的にも有名なアユ釣りのメッカ、蛇行する吉野川の流れを確認することができた。なんと、美しい流れ、清流であろうか。この川がもうすぐダム湖になってしまふ。複雑な気持ちであったが、川上村の人々が永年に亘り苦悩した末に出した決断だと思ふと、安易な言葉はいえなかった。ダム建設の結果であろうか、村の道路や橋、各種公共施設、一般住宅が立派で驚いた。その晩は森と水の源流館の職員の方々と会食し、楽しい情報交換の場となった。

三日目は車を走らせて大迫ダムを渡り源流部の北股川沿いの林道を通った。雪の中ではあったが生きた化石植物といわれるトガサワラの原始林を確認した。

## 百年の計で進める人づくり

三日間ではあったが、吉野川(紀の川)源流、川上村の歴史の深さと重み、そして吉野林業を築き上げた先人の努力など川上村の大きさの一端を感じることができた。森づくりは川づくり、それをなすのは人づくり、それぞれ百年の計にたち返り、多摩川源流の村づくりに向かって地道な取り組みを展開して行きたい。

# 多摩川「最初の一滴」学習会開く 狛江第五小学校 PTA主催

狛江第五小学校PTAは、2月3日、同小学校で源流研究所の中村所長を講師とする「多摩川「最初の一滴」学習会」を開催した。学習会には、千葉桂樹PTA会長、紺野美夫校長、文化委員の高橋さん、田口さんを始め38名の役員が出席した。

学習会では、始めに小菅村の佐藤英敏源流交流推進室長が小菅村の概要を紹介、続いて中村所長が、多摩川源流との出会いとその魅力に取り憑かれていった経過、「最初の一滴」に込めた思い、多摩川源流絵図作成の苦労話、源流研究所の活動紹介などを1時間30分にわたって講演した。

## 参加者の感想文

美しい自然環境を維持していくために多くの方々が苦勞されていることを知り感動しました。流域の人々との交流を通して森林再生事業に取り組んでいるとのことでしたが、「多摩川でできなければ日本では無理」という言葉が心に残りました。

所長の家族の話では親子が一緒に夢中になって何かをする経験は大人になっても親子の信頼へとつながるのだと思いました。狛江の多摩川はあまり綺麗なイメージではありません。しかし、源流はどれほど美しいかをお話と写真で見せていただき、一度は見たいと思います。百聞は一見にしかずですね。ぜひ伺ってみたいです。

# 『多摩川源流写真展』を開催

「多摩川の魅力を広く市民に知らせよう」とNPO法人多摩川エコミュージアムは、2月3日から27日まで「多摩川の源流写真展」を企画した。写真展は、前半が「多摩川源流写真展」、後半が「多摩川一都市に残された想いの回廊」をテーマに川崎市の川崎信用金庫本店ロビーで開催された。

3日の写真展オープニングでは、主催者を代表して井田安弘さんが、「多摩川は川崎市民にとって母なる川であり私たちの宝です。源流から河口までの多摩川の姿を多くの市民に知らせたい」と挨拶した。

「多摩川源流写真展」は、多摩川の誕生の瞬間をとらえた「最初の一滴」や、幽谷を迫力満点で流れ下る「妙見五段の滝」など23点が展示された。多くの市民が写真展を訪れたが、参加者の一人は「山登りはあまりしませんが、景色、自然の素晴らしさは感動ですね。自然の香り、音、風が響くようです。部屋に一枚置いて、いつも眺めていたい気分ですね。」と語っていた。

この写真展を企画してきた田中喜美子せせらぎ館長は、「多くの方が写真展に足を運んでくださった。源流の姿を知らない市民がまだまだ多い。今後もしっかり取り組みを続けたい。会場を提供していただいた川崎信用金庫に感謝したい」と今後の抱負を語っていた。



左から京浜河川事務所の海野信司所長、写真を提供した山中秀記さん、中村所長、川崎市まちづくり局の木村純一課長、主催者を代表して井田安弘さんの5名でテープカットしました。

# 川崎・水辺の楽校がノリづくり体験

多摩川の河口から東京湾に広がる「京浜工業地帯」の一角にある東扇島の港湾交流施設・マリエンで1月18日、川崎水辺の楽校ととろき校はノリ作り体験教室を実施し、80名の親子がノリづくりを楽しんだ。

教室には、「川崎の海の歴史保存会」のメンバーが講師として参加。さらにせせらぎ館の梶谷さん、狛江水辺の楽校の竹本さん、京浜河川事務所の海野所長、源流研究所の中村所長など多くの仲間が集まった。

ノリづくりは網に棒をのせ重箱でノリをすくって棒の中に流し込むわけだが、参加者はすつと流し込む要領がなかなか掴めない様子。すつと流し込まないと均等な厚さのノリが出来ない。ペテランさんはいとも簡単にノリづくりをしているが、やってみるとなかなかうまくいかない。子ども達も手助けをもらいながら楽しそうに体験していた。

体験後の対話集会では、子ども達が、歴史保存会のメンバーに次々と質問した。ノリは海の中でどうやってできるのか、いつ頃からノリ作りは始まったのか、手作りとは販売されているノリはどこが違うのか。体験した子ども達は、ノリへの関心がむくむくと湧いてきたようである。



川崎水辺の楽校 ととろき校 2014年1月18日撮影



## 第一回

全流域での市民と行政の連携が必要



海野脩司氏

私どもは青梅から下流のところ  
が管轄ということで、源流には手が出せないという現状があるが、いかに源流とかがわりを持つかが重要だと考えている。現在、流域のいろいろなところに活動の拠点や情報の発信をネットワークし、ミュージアムとして、下流の地域と上流地域の交流が始まっている。その方々の活動が多摩川流域の持つ価値を発見し共有する動きとなり、次のアクションをおこしていただきたいと考えている。

源流域に関してはいかに定量的にとりか、数値でどう評価できるかという話がでてくるが、科学的にできる段階ではなく、それよりもターゲットとしての評価をしたい。源流域は自然環境そのものでもあり、あるい

前号でお伝えしたように、源流の役割や価値と可能性の探求をテーマに「第1回全国源流フォーラム」(平成15年12月13・14日)が行われた。今号では講師の海野氏と恵氏の意見発表(要旨)の続きを紹介する。お二人からは具体的な運動形態に関わる提案があった。

# 流域の視点から見る 源流の魅力

はそこに棲む生物がたくさんいる。われわれ人類はそういった生物多様性の中から出てきている。森林のもつ機能、役割も合わさって源流域を構成しているのではないか。これからは流域全体という観点は不可欠であり、源流域は自然も豊かで、五感に訴えるものは、かなり刺激的だ。体験をしていく中で、新たな価値を知っていくということもできるだろう。

多摩川でいろいろな活動をする上で中下流域には市民団体の受け皿がある。源流域は、源流協議会が設立され動きが開始しているが、まだまだ受け皿が弱いのが現状ではないかと思う。源流域と中下流の市民とが連携し、それを行政が補助してパートナーシップを広げていく必要がある。



## 全国源流フォーラム



第1回全国源流フォーラム(2003年12月13~14日)

「エコプライド」の視点で  
「流域経営」を



恵小百合氏

1995年に設立された荒川流域ネットワークは、2003年で66団体と13人からなるネットワークだ。この11月2年、「エコプライド」と「流域経営」というキーワードが私達の中では挙がっている。エコプライドとは、エコロジカルに支えるという視点とエコノミカルにも支える誇りという二つのことを兼ねている。それから、流域をただ守るというだけではなく、経済的に源流から河口までお金が廻る仕組みをどうにか興し、流域経営をしたいと考えている。地球を守るためには、各地域にすむ地元の人々が動くしかない。そういう話題を全流域的に広げ盛り上げたい。

荒川流域ネットワークで掲げている5つの使命を紹介する。一つ目は「清流を蘇らせる」。二つ目は自分達の家に降った雨を自分達が水源地として貯める「あなたの家も水源地運動」。三つ目は川で遊ぶ子ど

も達を増やす「ミスガキの復活キャンペーン」。この活動は自分達の地域の水辺で遊べる、排水の先で遊べる地域づくりにつながる。そして、四つ目に流域の観点から地域の木材を使おうという「木遣い運動」。市町村の教育委員会に「木の机や椅子、木材を使った教室を各学校」教室位設けよう」と地域資源の活用促進を呼びかけている。さらに、五つ目には「流域資源を広い視野で経営」して環境保全にもつながるよう流域市民で守ろうというものだ。

絶滅危惧種となろうかというミスガキ復活を考えると、大人が一生懸命やっている、子どもは寄ってやることを意識して活動している。大人が水辺で環境調査をしていると子ども達が寄ってきて、網などを横取りしていくということを身近に体験している。そういう意味でミスガキが生息できる環境を再生し、ミスガキを増やしたい。また、ミスガキを育てる上では源流の存在を皆に知らせることも大事なひとつだろう。源流に触れることは社会を知らない最近の若者もきりりとなるような現実との出会いの機会にもなる。源流との交流は、日本人全体の幼稚化脱出のカギとも成り得るだろう。



### 議論つくし計画策定

多摩川流域懇談会主催の第14回多摩川流域セミナーは2月7日東京農業大学グリーンアカデミーホールで開催され、河川整備計画フォローアップの検討が行われた。

「多摩川水系河川整備計画」(直轄管理区間編)(以下、「河川整備計画」)は、約2年の歳月をかけて様々な立場の人々が議論を重ね、平成13年3月に策定された河川法に基づく計画である。

河川整備計画に記述されている事項は、多岐にわたっているが、①河岸維持管理法線(防護ライン)を設定し自然な流れを最大限尊重していくこと、②機能空間区分を設定し河川の利用と保全のルールを定めたこと、③維持管理を含めた川づくり全般の計画であることを3つのポイントとし、これに基づいて戦後最大規模の洪水を安全に流下させることを治水の目標にするなど、具体的に5つのアクションを推進している。

事業の推進にあたっては、これまでも、多摩川流域懇談会が主催する多摩川流域セミナーや多摩川流域懇談会運営委員会での意見交換、ホームページを利用した情報提供

## 「河川整備計画フォローアップ」(案)

国土交通省京浜河川事務所調査課 石田和也

と意見の収集等を通じて、随時、断片的な状況の報告を行ってきたが、

河川整備計画策定後約3年を経過して、これまでの実施状況を総合的にフォローアップしていく必要があると考えた。河川整備計画の策定は、現地での確認作業を含め市民と行政の徹底した議論を前提に策定されており、フォローアップでも市民との活発な議論を交わしながら進めていきたいと考えている。このため、フォローアップレポート(たたき台)の作成とこれらに関する意見交換を平成16年2月7日(土)東京農業大学グリーンアカデミーホールで実施した第14回多摩川流域セミナーの場で行った。

京浜河川事務所では、河川整備計画に対するフォローアップの意義とその仕組みを次項のように考えている。

- ①計画の達成度と達成方法を点検。
- ②点検結果の説明責任と透明性の確保。
- ③社会や自然状況及び技術の進捗の監視。
- ④試行錯誤を重ねながらよりよい仕組みづくりを構築。
- ⑤これらを踏まえて、河川管理者が責任を持ってフォローアップを実施。

### 流域全体を視野に

今回取りまとめたフォローアップレポート(たたき台)では、実施状況の報告の他に、河川整備計画を進める上での課題、河川整備計画の今後の方向性をとりまとめている。

源流域では河川整備計画を進める上での課題として「今まで以上に、流域全体を視野に入れた取り組み」を挙げ、これを推進するために、京浜河川事務所だけでなく、流域内の都県、自治体はもとより、流域住民との、より一層の協力・協働体制を築いていくことが必要であるとした。さらに流域セミナーにおいても中村所長から「源流となつた計画をしっかりと位置付けて頂きたい」との発言があり、会場から拍手喝さいを浴びるといふ場面もあった。

河川整備計画のフォローアップについては、まだ完成されたものではなく、試行錯誤を重ねながら、「多摩川らしく美しい心安らかな水系の実現」をめざして市民との共働をすすめていきたい。

## 小菅の湯 リニューアル オーブン

小菅村の日帰り温泉施設「小菅の湯」が、今年2月1日に新装オープンしました。

泉質は高アルカリ性で、神経痛や筋肉痛、冷え性などに効能があります。露天風呂、ヒノキ風呂、ジャグジー、うたせ湯、寝湯に加え、今回は、「イベント風呂」「五右衛門風呂」などが新設され、休憩室も充実しています。館内の食事処もヤマメなど地元の食材を使ったメニューが豊富で、毎月替わる旬のメニューで源流の里の味覚が堪能できます。



リニューアル「小菅の湯」

また、併設の物産館で販売している地元産野菜に、栽培者の名前と顔写真を付け始め、安全でおいしいワサビ、コンニャク、味噌、漬物等が手に入ります。

# '04多摩川源流 緑のボランティア募集!

=「森林再生プロジェクト」をあなたの手で=

## 「森林再生プロジェクト」事業にご協力を

多摩川源流に広がる民有林の多くは、木材の大量輸入による木材価格の低迷により、間伐などの手入れが行き届かず、森林が荒れています。私たちは、これにストップをかけようと「森林再生プロジェクト」事業を始めました。

ご承知のように、森林は木を育て、水をたくわえ、空気をきれいにしたりと、私たちの暮らしや命と密接に関わっています。森林を育てることは、川と海とふるさとを守ることです。



## 広がるボランティアの輪に確信と希望!

私たちは、昨年、この民有林の深刻な状態を改善していくために、東京農業大学の専門家の指導で「森林診断白書」を作成して、地元森林組合の支援とボランティアの協力を得ながら、間伐や枝打ちなどの「森林再生プロジェクト」事業を実施しました。

自然を愛する流域の市民の皆さんが、ボランティアとして参加し、源流の森に新しい光を注ぎ込むことにより、森林再生への力強い第一歩を踏み出しました。広がるボランティアの輪に地元では、新たな希望と確信が生まれつつあります。今年も是非、「森林再生プロジェクト」事業のボランティアに応募ください。あなたの「優しさ」を待っています。

- 主催 小菅村役場・多摩川源流研究所
- 協力 北都留森林組合小菅支部・東京農業大学森林政策学・造林学研究室
- 場所 小菅村内の民有林他
- 年間活動日(定員はいずれも40名・募集対象は16歳以上69歳までの健康な方)
 

|                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 第1回 5月15日(土)・16日(日) | 第4回 9月11日(土)・12日(日)  |
| 第2回 6月19日(土)・20日(日) | 第5回 10月16日(土)・17日(日) |
| 第3回 7月 3日(土)・ 4日(日) | 第6回 11月13日(土)・14日(日) |
- 参加費 4,000円(保険加入・宿泊・食事その他含む)  
(定員をオーバーした場合、抽選とさせていただきます。ご了承ください。)
- 日程(1日目の昼食・飲み物及び着替え、タオル・雨具は準備してください)
 

|  |
|--|
| 1日目 10時/JR奥多摩駅集合(送迎バス有)                              |
| 13時~16時/間伐・除伐・下草刈り作業<br>(宿泊は村内の民宿です。夕食の山や川の幸も楽しみです。) |
| 2日目 9時~14時/間伐作業                                      |
| 14時半~/小菅の湯で入浴  |
| 16時半/JR奥多摩駅解散  |
- 特別講座 チェーンソーの講習会 9月4日(土)~5日(日)  
講習料/9,000円 宿泊料/6,000円  
(資格)労働安全衛生法による「特別教育修了証」が交付されます。
- 参加申込先 小菅村役場・源流交流推進室  
TEL 0428-87-0111

